

「河童が覗いたヨーロッパ」

「河童が覗いたニッポン」 妹尾河童 新潮社

「第一回・NTTふれあいトーク大賞100選」NTTアド

早川 好江

これは、「ご趣味は？」と尋ねられて「読書です」と答えられない私から、私の同類の方達に贈る、「電車の中でも読める本」の紹介文です。

夏休み——サマーバケーション——旅。

夏休みは、楽しいけれど神経を張りめぐらして過ごした保育の日々の中で、蓄積された疲労という澱をとり、エネルギーを充電でき

る、ありがたい数週間です。そして、幸か不幸か、世話してあげるべき誰をも持たない私には、浮き世を離れ、こどもを離れ、異質な世界に身を置く旅こそが、その一番の手段になっ

ています。「河童が覗いたヨーロッパ」は、私に旅を見直し、さらには、日常の生活や保育にまで考えをめぐらす機会を与えてくれた、刺激的な本の一冊です。

河童さんは、舞台美術家で、古くは「ミュージックフェア」、近いところでは「NINA AGAWA マクベス」「リゴレット」を手掛けている方です。その河童さんの、全くプライベートな旅日記が、面白さ故に回りの人達をまきこみ、出版にまで発展したのが、本書です。ヨーロッパの安ホテルの記録に、三分の二以上を費やすという、とんでもない構成が本書を特徴づけています。

旅に出て、名所を観光するだけでなく、ありとあらゆることに、目を向けていくこと。それが、全編を通して流れる基本姿勢です。つまり、河童さんにとっては、ホテルの部屋の造りすら好奇心の対象であり、そこに住む人々の感性を知る手がかりとなっているのです。窓の大きさ、車掌さんの制服、バスの乗り降りの仕方、ごくごく当り前の出来事に、河童さんの興味は尽きることなく続いていき

ます。

これまで、私なりに自分の力で歩く旅をしてきたつもりでしたけれど、まだまだ私の感性は甘かったと、その視点の多様さに、私は驚かされるばかりです。感性の豊かさで、見えるものが違ってくる、保育の原理と同じです。

そして、私はハタと気づきます。この視線は何も旅の途次ばかりでなく、自分の身の回りにだって向けられる！

例えば、「バリのスイングドア」というほんの二ページがあります。押しあげたあと、はねもどってくるドアを通った後の、ヨーロッパ人と日本人の違いに、河童さんは気づくのです。つまり、ドアを持つ手をすぐには離さず、後から来る人を待ってから離す彼等と、すぐに離して後から来る人に迷惑をかけ私達日本人と。

私は世の中を見渡します。確かに後ろを確

認してから手を離す人は数少なく、サッと通り過ぎることが殆どです。実はかくいう私も日本人で、私より先にこの本を読んでいた姉にまず観察され、初めて、手を離していたという事実を知ったのです。後の人のことを思えば、少し押さえていた方がいいな、私は納得します。ところが、ボーッと通り過ぎた時、ハッと気がつけば既に手は離れて。今度は、小さな頃から身につけた習慣の持つ威力にびっくりします。ということ……。

自分を大切にし、それだからこその人も大切にできる人に育って欲しい、そう思って保育をしているけれど、見落としていることがあるのではないか。知らずに育ててしまっているよくない習慣がありはしないか。私の立居振舞いの中で、どれだけ他の人が意識されているのか。思いは様々に湧きあがって

るので。

本の説明からちょっと離れてしまいました。本題に戻りましょう。

この本を紹介するにあたり、心配なのは、旅好きでない方がどう読まれるかということ。スイングドアの例の通り、自分の回りの出来事に置き換えて読むことも、魅力のひとつなので、面白く読んでいただけるのではないかと思うのですけれども。

ひとつだけ難を言えば、河童さんの視界の中で、子どもは遠いところにいるということ。例えば、日本人である河童さんに対し、どんな反応を見せたかなんてことが入っていったら、私にはもっと魅力的だったことでしょう。尤も、そこまで望むのは、身勝手が過ぎるというもので、それを私の目でキョロキョロ気がついてくるのが、私の旅をつくりだすことになるでしょう。それにしてもこども

を離れようとして離れきれないのは、保育者のさがなんでしょうか。

ヨーロッパ編を読んで、河童さんとの相性が良さそうだと思われた方には、さらに、「河童が覗いた日本」をお勧めします。こちらは、もともと「話の特集」に連載されたもので、公表を予定して書かれており、ヨーロッパ編の「ひとりごと」に対し、「講演」といった趣になっています。その為、ヨーロッパ編に見られる新鮮な感動は、少なくなっています。好奇心のおもむくままに、何事も見逃すまいとする河童さんの姿は同様です。そして、言葉が通じる分、納得のいくまで調べつくそうという姿勢が強くなっています。

「京都の地下鉄工事」「裁判（傍聴のすすめ）」「皇居」……本書を通して、日本人でありながら、全く知らずにいた日本の姿を、私

達は目の当たりにすることができます。また、解説の文字までもが、遠近法にのっとって描かれている綿密な俯瞰図は、それだけで、電車を乗り過ごしそうになる楽しさです。また、その内容の殆どが、七、八年前のものであり、今、どうなっているかを考えるのも、一興です。

ところが、「へえー。ふうん。そうだったんだ」うなづきながら読み進むうちに、少しずつ、河童さんのつぶやきが聞こえてきます。「ところで、あなたはどいう思うの?」「読み終えて、忘れてしまうのでなく、僕が疑問に思っていること、考えてみてほしい。その上で反対するもよし。でも、僕と同じに思ってくれればうれしいな」

声高に、説得しようとするのでなく、あくまでも私がどう思うかを大事にしてくれている河童さんです。そして、この姿勢こそが、

この本の一番の魅力になっているのだと思います。

「第1回・NTTふれあいトーク大賞一〇〇選」という文庫がNTTから出されました。トークの日になんで、定価も百九十円としゃれています。

題名の通り、「誰かに伝えたいうれしかったこと、感動したことをお寄せください。」というNTTの呼びかけに集まったトークエッセイの中から、百点が、掲載されています。ショートショート風あり、新聞の投稿風あり、書くことのプロでない人達が、自分の内にとどめておけない感動を、思い思いの言葉で語っています。世の中、まだまだ捨てたものじゃない、そう思わせてくれるエピソードが、いっぱいつまっています。

本当に気軽に手にとれる本です。でも、全

ての本がそうであるように、何を読みとるか
は、読み手次第。人間関係論、社会福祉論、
文体論、e t c. ただ、批評する——読むこ
とのプロ——でない私には、少しだけ気持ち
の沈んでいる時に、ありがたい一冊でした。

(まんとみ幼稚園教諭)